



インドネシアでの防災教育の様子(国崎さん提供)

「チームNAMAZU 全体会」講演 「防災教育の普及と高度化の必要性」

危機管理アドバイザー 国崎 信江

防災教育で命救いたい 涙の再会「話聞いてなければ…」

2021年12月2日、まちの救助隊チームNAMAZUの全体会が、けんせつプラザで開かれました。その中で、危機管理教育研究所の代表で危機管理アドバイザーの国崎信江さんが行った講演の一部をご紹介します。(文責・見出し共に編集部)



国崎信江さん

2004年のスマトラ島沖地震では大きな津波が発生しました。私は現地インドネシアのバンダ・アチエに行ってその津波の調査と子供たちへの防災教育活動を行ないまし

た。地震当時は残念ながら防災教育が充実しておらず、地震の後に津波が来るというこ

とをほとんどの方が知らずに、まず逃げろという発想がありませんでした。海の変化を見に行ってしまったというようなこともあり大きな被害になってしまいました。

支援のお礼にと、現地の子供たちが津波に襲われた時の劇を見せてくれました。観ていると涙ながらに演じているという劇でした。私は、知らないことで奪われてしまう命がある、それは日本の子供たちにも言えるのではないかと思います。

防災教育を普及させなくてはならないと考えて活動もしていたのですが、2011年の東日本大震災ではアチエで見たような光景が目の前に広がっていて、本当に絶望的な

気持ちになりました。私は震災の3日目に現地に入ったのですが、2004年からこの11年、一体何をやってきたのかと本当に自分の無力さを感じました。ただ一方で励ましもありました。東日本大震災の1カ月前に大船渡市で防災講演会を行っていました

が、その時に聴講してくださいました。それ以降、国や自治体の防

学んだ知識を 地域に還元する

それ以降、国や自治体の防

った方全員が生きているということを確認できました。涙ながらに再会して、あの時あの話を聞いていなければこ

にこれほどの津波が来るという

ことをイメージしてなくて

真剣に逃げていなかったかも

しれないという話がありました

た。それが今の私の励みにも

なっています。

科学的根拠うすい指導も

日本の防災、進化必要

防災教育の重要な視点として、私はそこに科学的な根拠があるのかを意識してその普及と高度化に努めています。

我が国の防災は大正時代から進化しておらず、過去の被害

実態の解決に結びつかない防災教育に憂えています。実際に阪神淡路大震災以降様々な被害を見ておられるのに、どうして国民は備蓄ばかりを意識し

ているのだろうか、それよりも土地や家の耐震性の方が重要だということがどうしても伝わっていきません。「机の下に潜りなさい」という防災

教育指導がありますが、実は科学的な根拠はいままでの

す。テーブルの下に潜って命が守られるのにか

について実験動画を見せながら子供たちに考えてもらいます。慌

てて外に出ないとか机の下に潜るといったのは正解でもあり不正解でもありません。耐震性の低い家では多少の

災関係の委員を務めているということもあり、災害の際はいち早く被災地に行き、被災市町村の災害対策本部に入って行政職員の支援をしています。

防災教育に関しては、25年前の阪神淡路大震災を機に防災教育プログラムの開発と教材作りにも取り組んで、この25年の間に相当な防災教育に関する書籍やコンテンツを社会に出してきました。

現在提唱しているのが、地域貢献型防災教育です。学んだ知識を自分だけの財産にするのではなくその経験をどのように地域に還元していくのかということ意識して行なうものです。例えば学校の美術や図工の時間に、子供たちが避難所で必要なルールを

ち避難所で必要なルールを

高年齢者や外国の方でもわかるように絵で伝えるピクトグラムを作ってもらいます。子供たちは頭の柔らかさで様々な絵を書いてくれます。その中から「これはよく伝わるよね」

ことが重要。耐震性のある家なら慌てて外に出るより室内で机の下に潜って倒れる物から身を守るほうが安全かもしれない、ということ。

環境変わっても訓練は昔のまま

また、火災の際に「濡れたハンカチやタオルを鼻や口に当てて姿勢を低くして避難する」という指導があります。消防審議委員のときに意見しましたが、有毒ガスを除去できないタオルやハンカチの必要性を感じません。学校の校舎

日防災の現状です。

釜石の奇跡」の伝言

震災以前より防災教育

は、率先して避難をして多くの方々を救いました。すぐそ

くわえていく。ところが、ある人の手にちよっと傷。みんなの結論、「あのカマキリは初心者だったんだよ。こんな楽し気なのは何年振りか。」

コロナ禍で、バスでは以前のような酒、ゲーム、唄もないなでしたが、それなりに満喫したバスレクとなりました。日野支部の「清水港クルージングとみかん狩り」でした。

また、ここまで津波が来るという海拔をアサインしたプレートを作り、それをどこに貼ったら効果的だろうか子供たちが地域の方々と一緒に貼っていく活動もあります。

ばにあった鶴住居小学校の子供たちは、最初は3階に避難していたのですが、釜石東中学校のお兄さんたちが一生懸命に外を走っているのを見て外に避難することを決断して救われました。

釜石東中生は「想定外に対応できる力を身につけるには普段のことを真剣に行なうこと。普段をしつかりしてこそ大事な時に普段以上の力が出る。これは避難訓練だけでなく何事にも通じる」とのメッセージを残しています。釜石東中学校の生徒は震災前から防災教育に熱心に取り組

み、自分たちで生きるための行動を考えて実行してきました。そのことから、固定観念にとらわれずに、防災に柔軟な発想で果敢に取り組んでほしいと思います。

東日本大震災で「釜石の奇跡」と呼ばれた釜石東中学校



何年振りか 楽しいバスレク

電工 西村滋雄

「お前、みかん何個食べた」「9個。お兄ちゃんは」「12個」。それを聞いた大

人たちは驚きの目。大人は4〜5個で「もう、腹いっぱい」。あそこの木のみかん、すごく甘いよ」「いや、この木のみかんだよ。食べた?」「この木はすっぱかったよ。味が全然違うんだよね」みんなが楽しんでいる。その1時間前は、カマキリとたわむれていた。デッキでカマキリにエサをやる。本当に上手にエサをしながら、飛びながらエサを

また、ここまで津波が来るという海拔をアサインしたプレートを作り、それをどこに貼ったら効果的だろうか子供たちが地域の方々と一緒に貼っていく活動もあります。

(日野)

東日本大震災で「釜石の奇跡」と呼ばれた釜石東中学校の方々を救いました。すぐそ

「釜石の奇跡」の伝言

震災以前より防災教育

は、率先して避難をして多くの方々を救いました。すぐそくわえていく。ところが、ある人の手にちよっと傷。みんなの結論、「あのカマキリは初心者だったんだよ。こんな楽し気なのは何年振りか。」